

特集にあたって

千葉大学大学院社会科学研究院教授

小林 正弥

どのようなコミュニティが幸福であり、公正と幸福との関係はどのようなものであろうか。こういった問題についての「幸福についての公共研究」を推進するために、コミュニティ心理学の世界的な代表者であるプリレルテンスキー教授を招聘してシンポジウム「コミュニティの幸福と公正」（2017年11月23日）を行った。本特集はその記録を中心にしたものである。当日は、プリレルテンスキー教授と筆者の講演に続いて、坪田一男氏（慶應義塾大学医学部教授）、秋山美紀氏（東京医療保健大学准教授）、福島慎太郎氏（青山学院大学助教）、廣井良典氏（京都大学こころの未来研究センター教授）にコメントをしていただいた。発言の掲載を許可してくださった先生方に感謝したい。最後に石戸光氏（千葉大学）のコメントも収録し、石戸と小林が全体の編集を行った。

心理学というと個人の心理を扱う学問と思いがちであるが、プリレルテンスキー教授はコミュニティや組織、経済との関係にも目を向け、公正や正義の問題の重要性を指摘している。そもそもコミュニティ心理学は日本の社会科学では十分に知られていないが、さらに不平等や公正の問題との関係の研究はほとんど知られていない。プリレルテンスキー教授は、一般的にはコミュニティ心理学の泰斗として知られており、専門的研究書を多数刊行し、コミュニティ心理学の代表的紹介書も編集執筆している。

コミュニティ心理学の多くがコミュニティにおける個人の心理を研究しているのに対し、教授の研究により、その権力構造や経済的不平等などの公正に関する問題が個人の心理にも大きな影響を与えていることがわかった。個人の幸福を増進するためにもコミュニティや社会における公正の問題に取り組むこと

が必要である。このような観点の新しい研究分野は新コミュニティ心理学とも呼ばれており、プリレルテンスキー教授はその紹介書も編集執筆している。

これは心理学にとって重要な新展開であると同時に、政治学・経済学・社会学などの社会科学にとってもきわめて重要な問題提起をなしている。これらの分野においてはマクロな研究が中心で、個々人の心理や幸福との関係についてはこれまで研究がさほどなされていなかったからである。プリレルテンスキー教授の研究はこの関係について明確にしたという点で世界的な意義を持っている。

プリレルテンスキー教授はアルゼンチン生まれで、イスラエル、カナダ、オーストラリアで仕事をし、アメリカのマイアミ大学の教育・人間発達学部の前学部長であって制度的改革 (institutional change) のための vice provost である。コミュニティ・ウェルビーイングのアーウィン・バーバラモートナー講座の席にある。8冊の著作と120の論文を公刊しており、アメリカ心理学会で2014年に受賞し、2011年にはアメリカ心理学会のコミュニティ心理学部門でも受賞している。

最新刊の『良好状態への笑いのガイド——より幸福に、より健康になるためにユーモアと科学を使う』(2016年)¹は、笑いを呼ぶ話を用いつつ、個人間 (interpersonal)・コミュニティ (community)・職業 (occupational)・肉体 (physical)・心理 (psychological)・経済 (economic) それぞれの良好状態 (well-being) を説明する著作である。タイトルからもわかるように、この本はポジティブ心理学においても貴重であり、教授はポジティブ心理学にも関わっている。教授の研究グループはこの観点からの経験的研究のために I-COPPE 尺度という多次元的良好状態指標を開発している²。

¹ *The laughing guide to well-being: using humor and science to become happier and healthier*, Lanham, Rowman & Littlefield, 2016.

² Isaac Prilleltensky, Samantha Dietz, Ora Prilleltensky, Nicholas D. Myers, Carolyn L. Rubenstein, Ying Jin, and Adarn McMahon, Assessing Multidimensional Well-being: Development And Validation Of The I-COPPE Scale, *Journal of Community Psychology*, vol.43, n.2, 199-226, 2015.

なお、本シンポジウムは、千葉大学リーディング研究育成プログラム「未来型公正社会研究」主催の第4回国際シンポジウムとして行われたものであり、前日には第3回公開講座「コミュニティの『良き状態』の理解と促進 (Understanding and Promoting Community Well-being)」としてプリレルテンスキー教授の講演が行われた。文部科学省 科学研究費補助金新学術領域研究 (研究領域提案型)「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて——関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(領域代表：酒井啓子、平成28年度～32年度)との共催であり、科学研究費助成事業 基礎研究 (c)「コミュニティリズムと幸福研究——政治経済学における理論的・実証的展開」(研究代表者小林正弥、平成27年—平成29年)の一環でもある。

また、以上と関連する幸福研究プロジェクトの成果として、昨年度の特集「幸福研究の学際的転換」に続いて、内田由紀子 (京都大学こころの研究センター)「コミュニティの幸福について考える」、木下征彦 (日本大学商学部)「世界遺産とコミュニティに関する一考察——富岡製糸場を事例として」、杉野正美・田代佑妃「コミュニティレベルの幸福度を考える：ブータンの事例から」を収録する。いずれも、国内 (富岡など)・海外 (ブータンなど) のコミュニティに焦点を合わせており、文化心理学・社会学などの角度からの学際的な幸福研究である。

(こばやし まさや)